

2月26日から2月29日までの4日間、台湾大学で開催された“第3回日台院生交流会”に研究発表者として参加しました。この交流会を通して、自分の研究を伝える難しさなど多くのことを考えさせられ、学ぶことが出来ました。

交流会の準備を始めたのは、年が明けた1月。この時はまだ、今回のプレゼンで何を中心に話すかも決まっていない状態…。周囲が着々と準備を進める中、気持ちだけが焦りそこからスケジュール調整が始まりました。

プレゼンの内容が決まり、実験のデータなどが集まったのが2月。そこからは、英語のPowerPointの作成に取りかかりました。しかし、何よりも英語が苦手な私にはここからが大変であり、最も考えさせられました。実験と理論の両面からアプローチをする利点を伝えるためのイントロの作成、実験をしない分野の方々にどれだけ分かりやすく理論との関連をつけて話すかなど自分の拙い英語力で伝えなくてはならない難しさ。また、日本語だと今まで自分の中で曖昧ことも何気なく伝えることが出来ました。しかし、英語で伝えるためにはより理解しなくてははいけない。このことで、自身の研究をより時間をかけて再確認させられました。どうにか英語のプレゼンの準備ができたのが、交流会の2週間前。そこからは、英語の発音やアクセント、講演時間との戦いでした。思っていたよりも12分という講演時間は短くなかなか伝えきることが出来ず、逆に時間を気にしすぎると発音やアクセントがボロボロになる…この事に悩まされながらひたすら練習を続けました。その間にも、PowerPointの変更や数値計算のデータの追加など結局全ての準備ができたのは台湾へ向かう飛行機の中でした。しかし、ここまで準備したこともあり発表本番ではそこまで緊張することもなく講演出来たと思っています。(最初に話す言葉を忘れるぐらいには緊張していましたが…)

交流会も終わってみれば、自身の研究やプレゼンについて今までで一番考えさせられたいい機会だったと思います。今回、私は賞を頂くことが出来ました。それには、的確に指導やアドバイス、一緒に遅くまで発表練習に付き合ってくれた周りの方々のおかげだと思っています。また今回の交流会の経験を今後の研究に生かし取り組んでいきたいと思っています。

日台交流会が3泊4日に渡って開催された。我々は、この準備のために研究と英語に格闘し、国際的な力をつける良い機会となった。修士1年目にして、海外で自らの研究を発表する機会を得られることはとてもありがたいことであり、チャンスだ。また、教授陣よりもより私たちと近い存在である留学生や博士課程の方々、先輩方の発表を同じ発表者の立場で聴講できたのはなにより勉強になった。次ぎの二年目に進むための心構えを得る事ができた。修士1年目の締めとしてすばらしい経験ができたと思う。周囲のサポートしてくれた人たちに心から感謝したい。

この交流会で身に付くものは多い。特に英語に関していえば、プレゼンシートとスプリクトを書き上げるための“ライティング”、プレゼンを成功させるための“オーラル”と“ヒヤリング”、交流会を楽しく過ごすための“英会話”など、さすが実践、ほぼ大切な英語力を一気に底上げしてくれる！

修士といえども我々は基本的に英語が得意ではない。それを理解しているからこそこのプレゼンが成功するためには、周囲の人たちの協力が必要になることにすぐに気がつく。幸いにも先端研には、同じ

フロア内に相談にとってくれる留学生や先生がいる。今回の成功の鍵は彼らの援助によるものが多い。

現地では、台湾の方々の“おもてなし”のおかげで終日心地よく過ごせた。会場には、休憩の度にかわいい一口サイズのお菓子やサンドイッチなどを並べてくれていた。学生たちもフレンドリーに話しかけてくれ、親しみやすかった。ナイトマーケットや故宫博物院等の観光にも快く案内してくれ、研究発表以外での交流もとても充実することができた。現地のご飯は特徴的で、至るところに不思議なスパイスを感じる。お肉料理が多め、けど味付けは健康志向、身体に良さげであった。まだ数日間滞在したかった、というのが正直な感想だ。

日本に帰国した我々には、まだ研究の課題は山積みであり、修士論文や私には研究会が待ち構えている。しかし、この滞在でしばしの休息ができた。

謝台湾。来年また彼らに会えるのが楽しみだ。

博士前期課程 1 年 C.A

この研究会を通して、自分の成長と未熟さに気づくことができました。また、英語での発表の仕方や他分野の学生の研究を学び、自分の研究がどのように見られたかを知ることができました。自分の発表や他の学生の発表からそれぞれ次のことを感じました。

自分の発表と交流会では、これまでの成長と未熟さを確認しました。私は無限遠からの分岐現象について発表しました。そして、拡散誘導爆発というもののおもしろさ、そのメカニズムは解明されていないこと、先行研究について詳しく説明した後、無限遠からの分岐現象と拡散誘導爆発の関係性と現段階で進んでいる研究について説明しました。私のこの発表での目的は、拡散誘導爆発というおもしろい現象とは何か知ってもらうこと、そのメカニズムを解明するための手段に無限遠からの分岐があるということでした。実際、発表中に議論できなかつたことを学生たちと議論し合ったとき、拡散誘導爆発とはなにかを伝えることができていたことがわかりました。しかし、無限遠からの分岐現象との関わりはうまく伝えることが発表中ではできてきなかつたことがわかり、もっと発表の仕方を考えなければいけないと気づくことができました。

他の学生の発表では、他分野のおもしろさ、発表の仕方を学びました。普段あまり聞くことのない研究について知ることができ、分野の広がりを感じました。今まであまり触れることのなかつた内容に触れることができ、今後の自分の研究の刺激を得ることができました。

最後に私が感じたことは、以前の発表会と比べ、発表練習を多くしたこともあり、発表自体は自信をもってすることができたということです。しかし、発表だけでは伝えきれないこともあり、研究はもちろん、発表の仕方をもっと改善しなくてはいけないと感じました。今後は、これらの経験を活かし、研究を進め、誰にでも伝わる発表の仕方を考えていこうと思いました。

博士前期課程 1 年 R.N

今回の日台院生交流会は、私にとって初の国際発表でした。プレゼンをするための準備においては、発表時間が 12 分で、英語ということもありプレゼンテーションの内容が思うように作成出来ず、出発間近まで準備に追われました。具体的には英語圏に精通している海外出身のポストドクターの方に英語の

基礎的な文法をチェックして頂いたり、院生同士でお互いにプレゼンテーションの練習をし、わかりにくい部分を指摘し合い、互いに意見の交換しあうことで相乗効果を生み出すことに努めました。また出発前には講師やポストドクターの方に呼びかけ、疑似台湾発表会の場を設け本番で戸惑うことなく発表するために万全の準備を施しました。台湾へ行く事前準備だけでも、発表者それぞれのプレゼンテーションを見ることで良い点悪い点を理解することができましたし、さらには言語が異なり、かつバックグラウンドが異なる人に自分の研究の何を伝えたいのか、どのようにすればわかりやすく伝えることが出来るのか試行錯誤しなければいけない場面が多々あり、貴重な体験が出来たと思います。

台湾での公演中では、さまざまな分野の方がこられており、自分の知らない専門領域に触れることができ非常に興味深かったです。特に台湾生の発表では数学専門の方が多くまた外国語ということもあり、中々発表中に理解することが難しいため質問がしづらい部分もありましたが、いくつか質問をすることが出来ました。また自分の発表でも、日本人からの質問だけでなく、台湾の方からも質問をされ、日本での練習が役に立ったと思い非常にうれしかったです。しかしその際に自分の英語力の幼稚さ故に、質問に対して上手に答えられない箇所もあり非常に悔しく思い、今後はさらに語学力向上する努力をしなければいけないと思いました。

最後に交流会の目的である、「他分野との交流をはかる柔軟性を学ぶ」ということが果たされたのは言うまでもないですが、私はそれ以外にもつながりの強さの大切さを学びました。もし台湾の方々が親切かつ丁寧に接してくれなければ、私は台湾へ行ったのにも関わらず、日本人同士で行動していたと思います。しかし私のつたない英語にも関わらず、笑顔で親身になって話を聞いてくれて、非常に有意義な時間を過ごすことが出来ました。帰国した今でも、私は知り合った学生と Facebook で連絡を取り合っています。

4日間という短い期間でしたが、己の成長に繋がる経験をたくさんでき、有意義な時間を送ることが出来ました。来年も、講演者として、講衆として、日本人として海外の方と積極的に交流を図ろうと考えています。

博士前期課程 1年 K.T

The 3rd Taiwan-Japan Joint Workshop for Young Scholars in Applied Mathematics に参加させていただいて、様々なことを体験させていただきました。まずは、自分の研究発表についてです。研究発表をする機会は何度かありましたが、英語で発表するのは今回が初めてでした。出発前の準備では指導教官の上山先生をはじめ、ポストドクターの方々や留学生の方に添削やアドバイスをいただきました。また出発前におこなったりハーサルでは、忙しいなか多くの先生方、ポストドクターの方々に来ていただき、発表を聞いていただきました。そのときにも色々アドバイスをいただきました。交流会ではその発表が評価され、表彰をしていただくことができました。これも私をいつも支えてくださっている方々のおかげだと思いました。発表後には私の発表に興味をもってくださった学生やポストドクターの方々とディスカッションをする機会もできました。非常に良い経験ができました。この経験を生かし、表彰されたことにおごれず、ディスカッションのときにいただいたアドバイスも参考にして、今後も研究に励んでいきたいです。

次に英語での発言・ディスカッションをおこなえたことです。先述しましたが、研究発表後に台湾の

学生の方とポストドクターの方とディスカッションをおこなう機会がありました。研究について議論するのは日本語でも難しいのですが、今回は英語で話さなければいけませんでしたが、何度も聞き返しながらディスカッションをしました。相手の方には伝わりにくいことも多々あったと思いますが、質問していただいたことに対する自分の意見が伝わっていたらよいと思います。しかし私の発表中の質疑応答の際、質問の意味を理解できずに返答できなかったことが心残りです。その後、質問してくださった方と直接お話をさせていただき、納得をしていただきました。今後、このように英語で発表をする機会があるかわかりませんが、そのときはしっかり返答できるように、英会話の勉強もしなくてはいけないと思いました。

最後に台湾大学の方と交流できたことです。先述しましたが、台湾大学の院生の方やポストドクターの方と研究についてディスカッションをさせていただきました。研究について以外でも食事中などの時にお互いの生活や文化の違いについて会話をすることができました。このような会話があったからこそ、研究についての議論がしやすかったのではないかと思います。またこのような機会がありましたら、研究についてはもちろんですが、研究以外についても積極的に会話をしようと思います。

今回の交流会に参加したことによって、私自身が成長できたように思います。今回の交流会で学んだことを忘れることなく、今後の大学院生活を過ごしたいです。貴重な機会を与えていただきまして、ありがとうございました。

博士前期課程 1年 Y.N

台湾と日本の他大学の学生との交流を目的とするワークショップでした。英語でのスピーチだったので、大変でした。まずは、日本語での発表を完成させることから始めました。なんとなく研究していて、内容を理解できていない状況だったので、そこから苦労しました。15分発表を想定した構成でしっかり説明するスライドを作り、原稿も考えました。しかし、発表時間が12分に変更になり、3ページにわたっていた説明を1ページにまとめ、ちゃんとした説明ではなく、イメージを持たせるような説明に変えました。結果的には、あやふやな説明をした部分が、最後にオチになるという構成的に良いプレゼンテーションにすることができました。日本語で完成し、英語への変換です。留学生に見ていただき、訂正。確率を専門とするポストドクターの方に見ていただき訂正。指導教官の承認を得る。このサイクルを3回は繰り返しました。合格をいただき、丸暗記開始です。英語変換時に何度も読んだおかげで、暗記が必要なのは数スライド分でした。発表まで3週間ほど余裕がありましたので、自然に覚えることができました。発表でも、余裕のある楽しい発表ができました。

博士前期課程 2年 T.M

今回の台日院生交流会に参加いたしまして、台湾の大学の学生方と研究内容や歴史などその他のことに対するコミュニケーションをとることができました。まず、交流会1日目では私自身の英語での発表がありました。自分自身の発表を客観的にみると、やはりまだ研究内容を全て伝えられることはできなかったと思います。最も発表内容において、重要視される点や細かく割愛して良い部分を判断する力がまだ無かったということが正直なところだと思います。しかし、発表を行うときのジェスチャーについては

適切にできたかと思います。また、発表終了後の質疑応答時においてもやはり、まだリスニング能力やコミュニケーション能力不足ということもあり、適切な対応ができなかったです。しかし、2年前に参加した台日院生交流会と比較すれば、発表における英語での伝達能力、質疑応答時でのリスニング能力およびコミュニケーション能力の向上は見込めたかと思います。今までは、質疑応答時では先生方の助言されていたところが多々ありましたが、今回は私の英語のニュアンスはありましたが、全ての質疑応答に対応することができました。また、他の方々の発表を聴きまして、発表内容は勿論のこと、発表スタイルに対しても大変勉強になるところがありました。例えば、原稿通りではなく自分自身で考えて、ある程度の自然体で話すといったことや、重要ポイントは強調して発音するといった部分は他の発表を聴き、大変感銘を受けました。そういった点では私の発表は未完全な部分が多くあるとつくづく考えさせられました。2日目は他の学生方の発表を聴くのみでしたが、心臓を動かすための電気伝播で生じるスパイラル現象や拡散方程式の式構造を数学的に解析した研究、細胞内にワクチンを注入し、その拡散を数学的に解析した研究や為替のレートを解析した研究と多種にわたる研究発表があり、大変興味深い研究ばかりでした。今回の台日院生交流会で私の学生という身分での発表機会は最後であるとは思いますが、自分ができること全てを出しつくし、この交流会の準備ができたかと思います。発表の評価は自分自身でも大変良いとは言い難いですが、学生生活最後としては最高の発表ができたかと思います。

博士前期課程2年 A.S

私は、2012年2月26日（日）から2月29日（水）の間、台湾で開催された第3回日台湾院生交流会に参加しました。

発表準備をしていく中で、他分野の聴衆に自分の研究のおもしろさをどのように伝えればよいのか、分かりやすく伝えるためにはどうすればよいのかを試行錯誤する場面が多々ありました。このことを考えることで、研究内容を客観的に捉えることができました。また、今回は英語発表でしたので、文法や英語表現、発音に苦労しました。英語では曖昧な表現はできず、研究内容を十分理解する必要があり、自分自身の理解へと繋がりました。また、交流会直前には講師やポストドクターの方に呼びかけ、発表練習を行いました。多くの方からプレゼンテーションの方法や、発表の仕方などのアドバイスを頂きました。英語発表ということで難しさもありましたが、プレゼンテーション能力を向上することができました。

発表当日には、研究内容を聴衆に伝えることで、少しでも興味を持って頂けたのではないかと思います。発表後には、研究内容に興味を持って頂いた方と議論を交わすことができ、アドバイスや指摘を頂くことができました。また、台湾学生の発表は数学専門が多く、専門領域に触れることができ非常に興味深かったです。自分の研究に応用できそうな発表も多くあり、発表後に理解できなかった内容について話を伺うことができました。

親睦会では、参加された多くの台湾学生、教授方と交流を深めることができました。お互いの研究内容について議論を交わしたり、国の文化について話したりすることができました。英語で会話するため、自分の考えをうまく伝えることが困難でした。今後はさらに語学力向上する努力をしていかなければいけないと痛感しました。

この研究集会を通して、他分野と交流し、台湾学生と交流を深めることができました。台湾滞在期間

だけではなく、帰国した今でも知り合った台湾学生と Facebook で連絡を取り合っています。また、英語発表をすることで自分の研究を客観的に捉えることができ、英語プレゼンテーション能力も向上させることができました。この経験を通して得たことを、今後の研究や教員人生に活かしていきたいと思いません。

博士前期課程 2 年 Y. T

私は数学の研究に必要な能力は数学ができることだと思っていました。数学が得意で、数学に没頭することができ、何かしらの功績を出せば良いと勘違いしていました。しかし、この院生交流会を通して、数学に興味を持って打ち込むことはもちろん重要なのですが、それが全てではないということ学びました。例えば、人に研究を伝える力です。数学に限らず研究をしている人は、人に自分の研究の面白さを伝えられなければ、結果になったことになりません。人に自分の研究の面白さを伝えるためには、あえて議論を厳密にせず簡易化したり、ここが研究の面白い所だから強調したりなど、聴衆に興味関心を持っていただけるような配慮が必要です。私にはこの力が足らず、この交流会では発表がうまくできなかったと悔しさを感じています。このような工夫は学問をしているだけでは、決して身につかない力ですし、それに気づくことができたのは大変な収穫だと思いました。

また語学力も大変重要だと思いました。数学の研究でこれほど英語が必要になるとは思いませんでした。研究をするからには世界の最前線で戦わなければなりません。世界の研究者に認められるためには、人に自分の研究を伝えなければならず、そのために語学が必要です。今回は英語の発表となりましたが、それを痛感する良い機会となりました。いくら数学的に良いと思っている結果が出ていても、それが伝えられなければ価値がないのに等しいです。また世界の人たちと議論をするためにも語学は必要なのだと思います。

しかし、「学びて時に之を習ふ。亦説ばしからずや。朋有り遠方より来たる。亦樂しからずや」とありますが、この言葉のように、数学の研究を通して、台湾で友人を作れたことは私の中で大変貴重で喜ばしい経験となりました。同じ分野の研究をしている人や外国の研究者との台湾での議論はとても刺激的でしたし、数学の研究をしていたからこそこのような出会いをすることができました。

私の明治大学大学院最後の院生の活動となった今回の交流会ですが、以上のような悔しさあり、収穫があり、しかし異国の地の友人を作ることができ、全体を通して大変有意義な交流会をすることができました。最後に「人知らずして慍みず。亦君子ならずや」という言葉がありますが、研究者の世界で生きていくことは大変に厳しいことなのだと思います。私のこの院生交流会の感想文はこの言葉で結びたいと思います。